

社会科学の不充分な点を精神分析学的心理学でつなぎあわせるという発想（発想）という程度のものであろう）で綜合化あるいは、社会科学の組織化ができるわけではないのである。しかも彼はそのことを次のように説明している。△去来する記憶、夢、子どものあそび、離乳の仕方広告のシンボリックな内容、大衆小説や映画などのデータは、△低い扱いしかうけていなかったが△それらはじつは歴史の素材であったのである△と。彼の指摘していることに間違いはないが、彼はそのような△データ△のなかに△歴史△を解消してしまっている自己の理論に気づいていないのである。

彼の著書が△孤独△という言葉を用いているからではないが、この社会学の理論は△孤独△の理論であるといえるように思う。アメリカ社会の病疾は、理論そのものに反映しているのである。個人と個別的現象にのみ拡散していく社会学論は、政治の問題ととり組んだときもっとも悲劇的敗北を喫するのである。他のアメリカ社会学と同様、彼もまたその悲劇をこの著書のなかで示している。

リースマンの思想はアメリカ社会を病理学的に分析しながら、なおかつその基礎にユートピア志向のヒューマニティをひそめている。その夢多い思想もすでに△説教であり

訓戒にしかすぎない△（トム・ヘイドン）という批判をあびているという。彼はすでにアメリカの古い△良心△に属するのであろう。体制のなかで折衷的、自己矛盾的にユートピアを志向してみても、もはやアメリカの病疾は救済しないではなからうか。

この著書を取りあげたのは、日本にとつて深いかかわりをもつアメリカの、現代の危機状況を認識することが、日本の現代を認識するうえで不可欠なことであると考へたからである。主としてリースマンの社会学論の限界性への批判を試みたわけであるが、このようなリースマンの理論的姿勢を前提として、アメリカ社会からのレポートとしてこの著書に接してもらいたいと思つたのである。（みすず書房刊）

丸山照雄

## 周武法難の研究

野村耀昌著

本書は立正大学仏教学部長、野村耀昌教授の学位請求論文である。

周知のごとく、従来、隨唐時代は、シナ仏教史研究者が夙にこれを重視し、經典繙訳史より本格的な思想研究史に移行する切点として着眼されてきた。しかし、その切点を形成する上で、最も重大な契機の一つとされるべき北周武帝の苛酷な廢仏事件は、一般に△三武一宗の大難▽の一つに数えられて人口に膾炙されていながら、未だ充分に研究されたものが尠なく、その多くは唐の道宣が撰述した浩澗な史書に記されるところを抜粹敷衍されるのみであった。

本書は、著者が多年にわたってこの問題を追求してきた総括ともいうべきもので、当時における社会情勢、政權担当者との抗争、武帝の行跡及び性格等を詳細に検討し、更には当時の北シナ周辺の塞外民族の興亡との関連をも討究した結果、武帝の廢仏事件がこれらの社会的背景と密接に関連していることをつきとめ、従来の所説と全く異なる観点からその原因を究明し、論述したものである。本書はそのような精緻な分析とともに、邦文で書かれた最も精しい北周史ともなっており、また末尾に附された「年表」も従来の東洋史関係の諸書にその例を見ないもので、仏教学・東洋史研究に裨益するところが多い。

本書は野村教授が永年にわたり研究した成果であるが、本書の研究内容が特殊なものであるために特殊な文字等が

多い関係もあって、出版が非常に困難であるため、これまで教授の齋底に秘されてきた。そのような経緯もあり、本書がこのたび出版されたことを心からよろこびたい。

### (主要内容)

#### 序

第一章 宇文泰の興起・及び高歡との対立

第二章 宇文護專政下における武帝

第三章 武帝親政時代の概況

第四章 宇文泰・宇文護時代における仏教の地位

第五章 北周における儒教の地位

第六章 備元嵩の上書とその影響についての考

第七章 武帝親政前における三教論争の経緯とその背景

#### 景

第八章 武帝親政後における三教論争とその経緯

第九章 建徳三年廢仏前後の経緯についての考

第十章 建徳六年の廢仏と慧遠の抗争についての私見

第十一章 大象二年、復仏の詔にいたるまでの経緯とその背景

第十二章 擡頭期における突厥の動向並びに黠々の殘党

の北斉亡命について

第十三章 登位年(五五三)における突厥木杆可汗の版

図拡大

第十四章 北周と北斉との抗争の背後に介在する木杆可

汗の勢力

第十五章 北周武帝と他針可汗との関係

第十六章 龐仏の目的とこれを企図した時期について

第十七章 三武一宗の法難と周武法難の位置

年表  
索引

(東出版刊)

## 現代に生きる宗教者の証言

日本宗教者平和協議会 編

本書は、今日まで宗教者として平和運動に取り組んできた三十三名の宗教者の証言集である。

北海道から沖縄に至るまでの全国各地における平和をめざす宗教者の姿、九十四才の大西良慶老師から二十代の宗教青年に至る世代が刻み・現に刻みつつある歴史の一頁、それに仏教各派、キリスト教各派、教派神道等の信仰の発

露を主張しつつ、その相違をこえた宗教者の団結のありさま等、貴重な近・現代宗教史の側面が語られている。日蓮宗関係者では、細井友晋師「今日における宗教者のたたかい」、三谷会祥師「心に日中不再戦の碑を刻みつつ」、中濃教篤師「ベトナム戦争と宗教」、近江幸正師「原水禁運動の統一と前進を願って―『折鶴行脚』の経験から」、遠藤教温師「たちあがる宗教青年の決意」の執筆がある。本書は、第一章・内なる心の平和から外なる世界の平和へ、第二章・たちあがる宗教者、第三章・ベトナム戦争と宗教者、第四章・宗教者平和運動の課題と展望に、分れている。

第一章では、戦時下における大本やホーリネス弾圧の実相や体験が記されているが、特に壬生照順師の新興仏、青弾圧事件の記述は、治安維持法にもとずいて、政治権力がいかにきびしい抑圧を行なったか、を体験的に明らかにしている。「われわれの信仰は不義と妥協することではなく、不正に対して、怒り、これと闘うものでなければならぬ」という意見は、風雪に耐えてきた師の言葉だけに一層の説得力を持っている。同じく高木幹太牧師(北千住教会)が神は現実の矛盾の解決のために戦う人間になることを教えている、として、信仰と社会科学にみちびかれた実践に取